

開催地名	愛媛県 鬼北町
開催日時	令和7年2月15日(土)9:30~10:30
開催場所	広見体育センター
語り部	石川 善憲(茨城県日立市)
参加者	自主防災組織会長、防災士等 65人
開催経緯	当町は、山間部に位置し、南海トラフ地震想定では、震度6強(一部震度7)を想定された地域であり、谷間に集落が密集し急傾斜地も多く存在しているため、危険個所が多い。そのような状況で、被災地からの実体験を交えた講和を受けることで、地域の防災意識の向上を促したい。
内容	(1) はじめに 自己紹介 講演者は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災当時、茨城県日立市立久慈中学校の校長として、2,000人以上の避難者の受け入れを経験した。その後も自主防災組織の会長として、地域の防災活動を牽引し、共助の実践や後継者育成に尽力している。 (2) 東日本大震災の体験談 地震発生時の状況 地震発生直後、ハザードマップで危険とされていた場所に、まさに津波が到達した。水は常に高いところから低いところへと流れるため、ハザードマップの通りに被害が発生することを実感した。久慈町では270軒が床下浸水し、水というよりもヘドロ混じりの泥水が流れ込み、水が引いた後も20cm以上の厚さのヘドロが町中に堆積した。 さらに、津波の影響で病院の地下に水が流れ込み、設備が使用不能となった。このため、病院は後に別の場所へ移転を余儀なくされた。また、津波により1,400台の車両が海水でショートし、引火して燃え上がるという大規模な火災が発生した。 校舎内では、地震発生時に校長と数名の教員は職員室にいたが、生徒は卒業式の2日後であり、一部の生徒が不在だった。地震の揺れがあまりに激しく、電気も止まっていたため、校内放送を利用せずに、大声で「教室待機」の命令を出した。結果的に、校舎の構造が単純だったため、声による指示でも迅速に対応できた。 また、職員室に置いてあったテレビは地震対策の固定ベルトで固定されていたにもかかわらず、倒れそうになったため、そばにあった刺股(さすまた)で支えながら対応した。避難命令を出すタイミングは非常に難しく判断に迷ったが、校舎の耐震性に不安を感じ、意を決してグラウンドへの避難命令を発した。 驚くべきことに、生徒たちは真剣に静かに行動し、避難訓練の半分の時間で全員がグラウンドへ移動することができた。避難後、学校の周囲には避難してきた住民の車が多数停車しており、グラウンドへの駐車誘導が急務となった。そこで、全教員の半数を車両誘導に配置し、どの車もすぐに移動できるように整備した。幸運にも、4カ月前に開催された「関東甲信越ブロック防災大会」での研修が役立ち、混乱を最小限に抑えることができた。 ・避難所としての活動 本来、地震でガラス窓が割れる可能性があったため、避難住民を校舎内に入れたくなかった。しかし、カーテンを活用して飛散防止対策を施し、安全を確保した。 避難所運営の初期段階では、居住地が高台にある生徒は帰宅させ、低地に住んでいる生徒は学校に留める判断をした。物資が不足していたため、役場の支所に毛布を求めに行ったが、70枚しか確保できなかった。さらに、断水も発生したため、傘立てや他の容器を活用して水を確保した。建設業者から提供された発電装置を利用して照明や暖房を確保し、テーブルタップを集めて携帯電話の充電ができる環境を整えた。しかし、通信回線が混雑しており、ようやく連絡が取れるようになったのは4時間後で、そのときに「全員無事」というショートメールを受け取ることができた。 寒さ対策としては、灯油や毛布を周辺住民から提供してもらったが、それでも足りなかった。そこで、避難所にいた子どもたちが「毛布引換券」を自作し、混乱を防ぎながら公平に分配する工夫をした。 近隣のスーパーからは、「冷蔵庫が壊れたので」と食料を提供してもらえたため、震災当日の夜

	には炊き出しを実施することができた。避難者の車の誘導と整備を適切に行ったことで、食糧の運搬がスムーズに行われた。 翌日には生徒の引き渡しを実施され、教員たちも4時間ごとのローテーションを組み、避難所運営と帰宅を両立できる体制を確立した。 ・生徒の活躍 全国からの安否確認の電話が殺到する中、最初は教員が対応していたが、その後生徒たちが自主的に対応し、避難所内で人探しや掲示板の作成を行った。また、被災2日目からは自衛隊とともに炊き出しを手伝い、トイレの水の管理も担当した。 被災3日後には飲み水の配給が開始されたが、5リットルの水を得るために7時間並ぶ必要があり、脱水症状で倒れる人もいた。このとき、生徒たちはお盆に水を汲んで提供し、体調不良者のサポートを行った。 被災4日後には行政が本格的に避難所運営に入り、学生ボランティアは解散となった。その後、久慈中学校の生徒の活動は小学5年生の道德の教科書にも掲載されることとなった。 (3) 震災後の活動 地域の防災意識を向上させるため、「防災まち歩き」を定期的の実施し、地域の危険箇所を点検して「久慈コム」というホームページ上に防災マップとしてまとめている。さらに、「コミュニティ・プラン」を策定し、住民の意見を反映させながら、地域の防災対策を強化している。 (4) まとめ 1.避難者の車両を適切に誘導・整備することで、配給車の入構など後の対応がスムーズになる。 2.災害時の通信障害を想定し、携帯が繋がらない状況にも対応できるよう準備が必要。 3.飲料水の確保が重要であり、井戸水などの備蓄を考慮すること。 4.女性視点での防災対策が不可欠であり、本・下着・ミルクなどの準備が求められる。 5.生徒・教員・地域が連携し、避難所運営を支えたことが成功の要因であった。みんなで協力する意識が防災の鍵となる。
開催地より	講師から、東日本大震災の時の避難所運営の状況等をお聞きし、改めて、発災前の防災対策が重要であるか再認識した。今回の講演を今後の防災活動等に活かしていきたいと思う。